

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25282050

研究課題名(和文) 自律的に学び続ける教師の核となる資質・能力の解明と質保証に関する研究

研究課題名(英文) A Research on clarification and quality guarantee of teacher's essential quality and ability who continues learning

研究代表者

浦野 弘 (URANO, HIROSHI)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：50185089

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：教師という専門職を遂行するために、教員養成と現職教育を一連の専門性発達プロセスとして位置づけ、反省的实践家としての学び続ける教師の育成とその集団形成の条件の明確化を目指した。主な結果は、教師の感情と学びの関係性および感情的側面を促す学びの方法に関する知見を整理し、教師の感情を彼らの学びを促す源泉あるいは契機として位置づけ得る4つの側面を明らかにした。教師の経験学習を構成する要因をモデル化し、それに基づき、学校外のコミュニティや学校の異動、自らの実践を対象化することが鍵になること等を明らかにした。教職大学院でのメンターとしての現職教員とストレートマスターとの関係の構築の重要性を指摘した。

研究成果の概要(英文)： The present study examined the conditions to accomplish the teacher as the profession over the life. We recognized that we had to investigate teacher training and in-service training to be a series of special development process.

As a result: 1. The finding concerning "Teacher's Emotion and relation of learning" and "Learning that urged an Emotional side" was arranged. Four kinds of teacher's Emotion is located as a source that urges own learning, and as an opportunity of learning. 2. We had modeled the factor to compose teacher's experience learning. In addition, the main five factors that the teacher oneself was able to keep learning in self-control from the life history of the teacher practitioners autonomous were clarified. 3. The effectiveness of the learning in the faculty and the graduate school is clarified through the analysis or the hearing survey etc. of the practice.

研究分野：教育工学

キーワード：教師教育 教師の質保証 学び続ける教師 教師の資質・能力 ポートフォリオ

1. 研究開始当初の背景

(1) 求められる教師像と教師教育

専門職の不確実性を積極的に捉えたシヨーンが、それまでの技術的熟達者という専門家像へのアンチテーゼとして、反省的实践家という専門家像を提起したことにより、「学習する人」「成長・発達していく人」としての教師の視点が注目されるようになった。INTASC によるスタンダードに“ The teacher engages in ongoing professional learning ” が位置付き、また中央教育審議会答申(2012)で「学び続ける教員像」が鍵として示されたように、教員養成や行政研修による受動的な力量向上に留まらず、自律的に学び続ける教師の養成が重要な課題である。

とはいえ、学び続ける教員に求められる具体的な能力とは何か。「学び続ける」という場合、これまでは個々の「意欲」や「資質」の問題と捉えられる傾向があった。しかし、教育現場で学び続けるには、Teacher as Researcher として実践を対象化し概念化することの意義、実践の文脈から解決すべき課題を発見し、解決のサイクルを見出すためのアクション・リサーチ等の方法論の理解、同僚や研究者とともに実践研究を進めるコミュニケーション力等が不可欠であるように、「学び続ける教師」を規定する下位概念の整理が喫緊の課題である。

(2) 教職志望学生と現職教師の質保証

教師の質保証は、教員養成と現職教育の各々において独立して推進されてきている。前者は、高等教育における質保証と連動し、各大学においてディプロマ・ポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、教員スタンダード等が明確化され、大学4年次後期で履修する教職実践演習でいかに卒業生の質を保証するかが検討されている。一方後者は、初任者研修や10年目研修、役職や専門別の研修、教員免許更新講習、校内での教員評価や校内研修といった形で実施されてきている。しかし、校種や校務分掌の違いにより教師の成長過程や質の捉え方が異なることもあり、特定の基準で質保証を議論することはこれまでほとんどなかった。

「学び続ける教師」としての質を保証するためには、教員養成から現職教育を一連の専門性発達のプロセスとして捉える必要がある。教師の質保証制度の確立と信頼性を向上するためには、養成と研修の当事者とは異なる機関の位置付けが重要となり、自己の実践をエビデンスに基づいて省察し、知識やスキルをアップデートしていく教職志望学生、現職教師の質を保証するための機関の位置付けなど、質保証のための制度設計が求められることになる。

2. 研究の目的

教師という専門職を生涯にわたり遂行する人材育成のためには、教員養成と現職教育を一連の専門性発達プロセスとして位置づけ、

反省的实践家としての学び続ける教師の育成とその集団形成の条件の明確化が喫緊かつ重要な課題である。本研究ではこの課題に応えるために、

(1) 自律的に「学び続ける教師」を規定する能力の解明

(2) 自律的に「学び続ける教師」の能力を認定するための質保証のための基礎研究

を研究目的とする。

具体的には、以下の4つの研究課題を遂行しようとするものである。

3. 研究の方法

前述した目的を達成するために、次の5つの側面から研究を遂行した。

ア) 「学び続ける教師」の核となる資質・能力・信念の特性：医療や看護等の専門職の成長に関する文献等の収集を図ると共に、オ) と連携し、現職教員や大学勤務の実務家教員に対して聞き取り調査を行い、教師が経験から学ぶ「教師及び教師コミュニティの経験学習モデル」を構築する。

イ) 「学び続ける教師」の質保証という側面から捉えた学校組織の特性：組織体の中での教師の成長を捉えると共に、学校内での指導・支援体制、校内研修等のあり方について、聞き取り調査を行い、管理職やサブリーダーの役割について焦点化する。

ウ) 教職ポートフォリオの標準化を目指した「学び続ける教師」に関連するキー概念の構造化とカリキュラム化：「学びの記述」という視点から、使用されている教職ポートフォリオの比較検討を行うと共に、電子化から再び紙媒体に移行した経緯を検討する。また、教師の学びを促す教師の感情的側面についても検討する。

エ) 「学び続ける教師」の養成という側面から捉えた大学における教員養成の課題と展望：大学主導の教育実習へと変容しつつある中、自律的に「学び続ける」という指導に焦点をあて検討すると共に、教職大学院における学びについても検討を進める。

オ) 任命権者の側面から捉えた教員養成の課題：採用あるいは任命権者側の職の経験を有する実務家教員の協力のもとに、自ら「学び続けた教師」の核となったものやその意識等の検討を試み、「教師の資質・能力」に関する情報を整理する。

本研究は、研究代表者及び研究分担者を中心としながら、国立大学教育実践研究関連センター協議会に加盟する機関の連携協力により遂行される。

4. 研究成果

主な研究成果を、以下にまとめる。

(1) 教師の経験からの学び(経験学習モデルによる面接調査から)

教職や管理職経験を豊富に有し、教育行政職として教員研修の企画運営に携わった経験のある校長を対象として、大学教員が面接

調査を行い、教師の経験学習を構成する要因を検討し、「経験から学習する状態」になっているかどうか（開く・閉じる）という軸で教師の学習を捉えたモデルを構築した。それが、図1である。

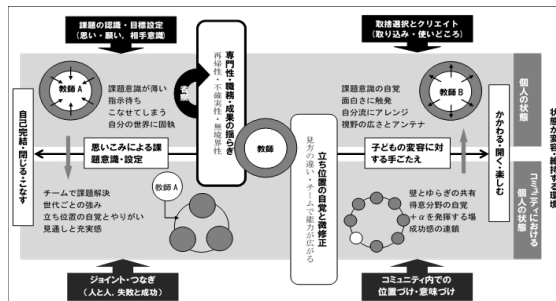


図1 教師の経験学習に関する作業モデル

このモデルをふまえて、3名の現職教師を対象にライフヒストリーの事例分析を行い、教師の学びはコミュニティ内の立ち位置によって変動すること、教師の学習の状態を開く上で、学校外のコミュニティや学校の異動、自らの実践を対象化することが鍵になること等を解明した。具体的には、教師の学習を「知識や技能を習得する」という捉え方ではなく、教師が「経験から学習する状態」になっているか否かに焦点を当てると、その流れは幾度となく「開く」と「閉じる」を行き来しており、「閉じる 開く」や「開く 閉じる」といった単調な一方のみの流れではないことが見いだされた。また、3名の教師の「開く」「閉じる」の自己評価は、教職経験の中で何度も「開く」と「閉じる」を行き来しているが、たとえ「閉じた」場合であっても、何らかの開く手がかりを手にして、学習へ開かれた状態へと変動していることが分かる。

そして、大学院における研究がこのような学習への状態をさらに開く上で、重要な役割を果たしていたことが見いだされた。3名の教師とも、大学院において自らの実践を理論的および実証的な視点から対象化することによって、開く・閉じるに関する自己評価が最も高くなっている。しかし、経験を実践者として対象化するだけでなく、Teacher as Researcher という自らの実践の観察者の視点を経験することにより、第三者に説明可能な水準で実践を意味づけることにつながると考えられる。

このような意味で、大学院における実践研究は、教師の学習を対象化し、開く方向へと促進する役割を担っていると言える。と指摘した。

(2) ライフヒストリーから見た教師の学び

交流人事教員（実務家教員）として、大学で活動した6人の「教師のライフヒストリー」を採り上げ、その教員としての成長を支えた「共通する知見」を見出した。

大学着任以前の学びでは、特に初任校での学びや挫折・無力を感じたときの学び（新たな学びの必要性）が、それぞれ採り上げられ、

共通点として「よき出会い（同僚・管理職・大学教員等）」があったことを指摘した。その他、「フットワークの軽さ」も共通してあげられ、担任時代とは異なる視点や役割を持つことになる中核的な主任経験、管理職経験や行政経験も、教員としての学びの広がりにつながっていることが明らかにした。

これらの結果から、自律的に学び続ける教師を支える多様な要因の中でも、モデルとなる人との出会い 環境（研修、公開、雰囲気、周囲の状況、人間関係）の影響 所属意識と役割の自覚 情報や学びの機会に関しての受信と発信 教員としての自尊感情と向上心 の5つが共通点として見いだされたことを指摘している。

さらに、「教師力（意識+感性）×思考×行動×積み重ね」という関係式を提案している。

(3) 教師の学びと感情

教師の感情と学びの関係性および感情的側面を促す学びの方法に関する教師研究の知見を整理した。その結果、教師の感情を彼らの学びを促す源泉あるいは契機として位置づけうることを確認した。先行研究から明らかになった点は、以下の4点に整理できることを示した。

教師の感情は、彼らの実践、彼らを取り巻く関係性のみならず、教育改革の進展にも影響を及ぼす重要な要素のひとつとして位置づけられている。

感情は、出来事に対する直接的な反応ではなく、「信念」「アイデンティティ」「目標」「実践」といった個人の内面に関わる諸要因と「生徒」「同僚」「管理職」「保護者」等、外的な関係性（環境）の両面から影響を受けながら生起するものであると特徴づけられる。

教師としてのキャリアを重ねることで、ネガティブな経験や感情が消失していくのではなく、いずれのキャリアフェーズにおいても、それらと直面する可能性がある。つまり、教師は常に、ネガティブなものを含む感情と向き合い続けなければならない状況にある。

教師が自らの感情と向き合う方法として、「ナラティブ」「個人誌を語る」といった方法が注目されている。そして、そのための場を確保することが求められている。

(4) 教師の学びにおける実践研究の意義

(1)において指摘した大学院における実践研究の意義を教師が学ぶ方法として、「自分軸」「他人軸」を相対化するという視点から、明らかにした。

これまでの大学院に入学してくる現職教師の多くの視点は、図2に示すように「自分軸」のみの視点から問題の定義、研究の方法、仮説の設定が行われる。そのため、自分軸以外の観点からの事実の把握が困難であり、教授行動および学習者の反応は自分自身の認識枠のみから観察となる。

大学院での研究を進める中で、多様な研究な研究アプローチに出会い、その存在を理解

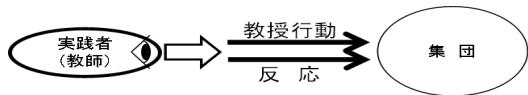


図2 自分軸のみの視点からの研究(レベル1)

し、学習者や教師を多様性の視点からも分析することができるようになると、図3のような他人軸を形成する萌芽的段階となる。

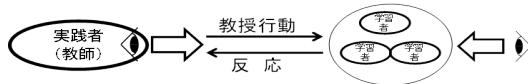


図3 他人軸形成の萌芽となる研究(レベル2)

そして、自分自身の実践を相対化・対象化し、自分軸を再構成することが可能となる段階は、自分と学習者の間のかかわりを第三者的に観察する立場から解釈することが可能となり、他者の立場から自分軸を評価することができるようになる(図4)。このレベルでは、自分自身を別の観点から俯瞰することが可能となる。

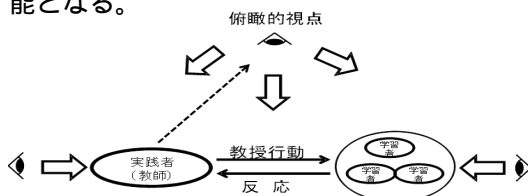


図4 自分軸の再構成が可能な研究(レベル3)

レベル2までは、学校現場での授業研究等を通して新たな視点を学び、発達することが可能であるが、レベル3は学校のみでは難しい。レベル2から3への移行が、大学院において現職教員が教育実践研究を遂行するとう経験に大きな意味が見出される。すなわち、ここでも関わる『他者』の存在」が指摘した。

(5) 教職大学院における授業と実践研究

宮崎大学教職大学院を対象に、FD活動を中心とした教職大学院での学びの詳細を明らかにした。教職大学院への聞き取り調査などをもとに、「ストレートマスター/現職教員」の学びと、「研究者教員/実務家教員」の役割という、二つの枠組みから教職大学院の授業と実践研究を検討した。

課題の他に、展望として3点を指摘した。

「大学」と「学校」がともに、これまで枠づけられた教師教育の中に閉じていたとすれば、その二つが同居しているのが教職大学院であり、また「大学」と「学校」がともに存在するという、これまでにない仕組みを持っている。それぞれの枠に横串を入れ「ストレートマスター/現職教員」と「研究者教員/実務家教員」の融合や相乗効果を明示的に考えていくことが求められる。

「学校」とは切り離された「大学」という場において、学校文化や教員文化を相対化することで、新たな研修や教員の学びを創造する可能性がある。熟達者/新参者という関係を超えてあらゆる世代・経験者が共に学び成長する研修や、実践を相対化し新たな視点で

自分の実践を再構築する研修が想定できる。

理論と実践の融合や往還の可能性である。実践のエビデンスや説明として理論を当てはめるだけの現在の「理論と実践の融合・往還」を、これからの教職大学院の教育では、「学校現場での実践と対話する中で理論の可変性」を見出し、修正・再構築することができるかが問われる。理論と実践の対話 理論の再構築 新たな実践 理論の見直すというサイクルこそが融合や往還の本質となる。

これらのことから、図5のような従来の教師教育(養成・採用)の構造に教職大学院が留まることなく、図6のような「多様なバックグラウンドを持つ人々」が混在する教育空間としての可能性を模索しながら、それぞれ

		指導者	
		大学教員(研究者)	先輩・管理職・指導主事等(実務家)
学習者	学生	大学における教員養成(大学院・修士課程の研究室教育) ↓ 研究室文化	教育実習 外部講師
	現職教員	免許講習 外部講師	校内・校外研修(学校現場・教育センター等) ↓ 学校文化・教員文化

図5 従来の教師教育(養成・採用)の構造

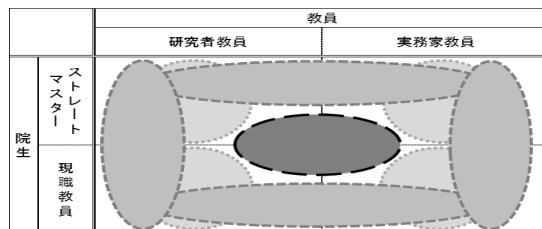


図6 教職大学院の可能性

の融合や相乗効果を明示的に考えていくことが求められると指摘した。

(6) 教職ポートフォリオの動向とその学び

教職ポートフォリオの動向を調査すると共に、それらをふまえた学生の自己評価(総合評価と観点別評価)および相互コメント機能を実装した教職eポートフォリオを開発した。

相互コメントは、目標設定、自己評価、相互コメントというサイクルを繰り返すことにより、ディプロマ・ポリシーおよび自己評価観点に設定された「理論と実践を往還する省察と改善の態度」が育成されることを期待したものである。

開発した教職eポートフォリオ活用の効果を明らかにするために、教育実習を終えた大学生を対象にアンケート調査を行っている。その結果、教育実習生は、教職eポートフォリオを活用して自己評価を通して、教育実習を客観的に振り返ることができるを感じ、自己課題を明確にできることが明らかにした。また、教育実習生間の相互コメントを通して、教育実習を改めて振り返り、相互コメントすることの意義を実感していることがわかった。そして、このeポーフ

オリオの効果については、自分の受けた教育の振り返り、目指すべき教師像の明確化、自らの資質・力量の現状理解等には効果がある一方で、これからの教職課程における学びの見通しを持つことに十分には寄与していなかったという課題も明らかになった。

(7) 教職に関する学生の学び

静岡大学教育学部における「教育と社会」及び「教職実践演習」の実践事例を対象にして、その成果と課題を検討した。

とりわけ、「教職実践演習」に対する学生の意識のアンケート調査からは、次のことが言えた。授業内容や授業方法では、担当教員の役割等を含めた授業全般の実施方法についての評価は高い一方で、事前説明の方法や教職履修カルテのあり方といった準備、および成績評価の方法や基準についての評価が低い。学校現場での体験的な学びに対する評価は高く、とりわけ「学校ボランティア」の満足度が際立つ一方で、正規授業内で実施した「訪問活動」への評価は低く、その実施方法に少なからず不満が生じている。所属する専攻・専修の専門的な知識や技能をはじめ、教員として身につけておくべき基礎的態度やものの見方、子ども理解や授業実践の能力は概ね身につけていると評価する一方、学級経営に関する知識や技能、および地域や保護者への理解については相対的に不十分さを感じていること等が明らかになった。

今日の教員養成改革では、即戦力的かつ実践的な指導力が重視されがちであるが、「学び続ける力」とは、そうしたものと異なる汎用性のある根源的な力(力量)を忘れてはならない。それは、本実践でも強く留意した学生の学びの振り返りを通して培われるものと言える。この振り返りが学び続ける力の基礎になるとすれば、教員養成段階でいかに振り返りの経験を積むかということが問われるであろうことを指摘した。

(8) 校内研究が成功している学校等

継続的に研究者が協働的に学校に関わり、校内研究が活性化していった過程を分析し、特に、次の3点が重要であることを指摘した。

新任の研究主任には準備段階では十分な時間が必要である。事例では、これまでの教職経験から新たな研修の在り方や全体像を推測することが出来ずにいる状況から、新たな研修スタイルが真に実現されていくに至る過程を示した。そこへの道しるべ的なものとして、毎回のステップアップすべき課題を指摘し、それを見事に浸透させている研修通信がキーであったことを示した。この実践の成功は、研究主任自身の成長でもあり、その成長を支援・指導した校長の言葉かけや、研究推進委員の協働連携にあり、とりわけ、校長のリーダーシップやフォロワーとしての若手の存在がキーであることを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

(雑誌論文)(計 22 件)

長谷川哲也・島田桂吾(2016)教職に関する科目におけるオムニバス型授業の効果に関する研究 - 「学び続ける力」の育成に着目して - . 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇), 査読無, 66, 147-160

姫野完治(2016)恩師のライフヒストリー研究を主軸にした教職科目の開発. 日本教育工学雑誌, 査読有, 39 (Suppl.), 9-12

前田康裕・益子典文(2016)熊本市教師塾「きらり」における師範による指導授業とその授業研究会の効果. 日本教育工学会論文誌, 査読有, 39 (Suppl.), 73-76

谷塚光典・東原義訓・喜多敏博・戸田真志・鈴木克明(2016)教職eポートフォリオにおける相互コメントに見る教職志望学生の成長. 日本教育工学会研究報告集, 査読無, JSET16-1, 533-538

谷塚光典・東原義訓・喜多敏博・戸田真志・鈴木克明(2015)教職eポートフォリオの活用による教育実習生の自己評価および相互コメントの効果. 日本教育工学会論文誌, 査読有, 39 (3), 235-248.

姫野完治・益子典文(2015)教師の経験学習を構成する要因のモデル化. 日本教育工学雑誌, 査読有, 39 (3), 139-152

谷塚光典・東原義訓・喜多敏博・戸田真志・鈴木克明(2015)教職実践演習に対応した教職eポートフォリオシステムの開発と評価. 教育システム情報学会研究報告, 査読無, 29, 97-102

谷塚光典・東原義訓・喜多敏博・戸田真志・鈴木克明(2015)教職eポートフォリオを用いた教育実習生間の相互コメントの効果. 日本教育工学会研究報告集, 査読無, JSET15-3, 15-20

島田希・柴英里・鈴木恵太・横山卓(2015)実習系授業を通じた教員志望学生の資質能力形成 - 目的理解度と満足度との関連. 日本教育大学協会研究年報, 査読有, 33, 75-86

姫野完治・大野栄三・近藤健一郎(2015)研究志向の大学における教職課程の現状と学生の意識に関する基礎研究. 北海道大学教職課程年報, 査読無, 5, 1-10

長谷川哲也(2015)「教職実践演習」の成果と課題に関する検討 - 静岡大学教育学部における2013年度の取り組みを通じて - . 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇), 査読無, 65, 151-164

佐藤光咲・浦野弘(2015)学校教育目標の設定とその教育課程へ具現化の事例. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 査読無, 37, 247-254

安達仁美・谷塚光典(2014)教員養成初期段階の学生に対する授業研究方法指導プログラムの開発: 教育実習生の授業研究会への参加を通して. 信州大学教育学部教育実践研究, 査読無, 15, 11-20

姫野完治・黒木健・齋藤沙夜花・關友明

(2014) 高校教師の力量形成と研修のあり方に関する基礎的研究. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 査読無, 36, 204-215

益子典文(2014) 現職教師の教材開発過程の事例分析 - 素材の教材化過程における教育的內容知識に関する基礎的研究 - . 岐阜大学カリキュラム開発研究, 査読無, 31, 37-50

益子典文(2013) 働きながら学ぶ現職教師のための研究セミナーにおける指導方略の記述と事例分析 - 夜間遠隔大学院における研究セミナー事例の検討 - . 科学教育研究, 査読有, 7(2), 135-148

島田希(2013) 初任教師へのメンタリングにおいて複数のメンターが果たす機能と役割意識. 日本教育工学会論文誌, 査読有, 37(Suppl.), 145-148

谷塚光典(2013) 信州大学における e ポートフォリオの運用と工夫 - 自己評価と相互評価による「目指す教師像」の構築を目指して - . Synapse, 査読無, 23, 12-15

谷塚光典・東原義訓・鈴木克明・喜多敏博・渡邊あや(2013) 教職実践演習に対応した教職 e ポートフォリオが有する機能の比較検討. 教育システム情報学会研究報告, 査読無, 28(5), 75-80

谷塚光典・東原義訓・鈴木克明・喜多敏博・渡邊あや(2013) 教職 e ポートフォリオを用いた教育実習生による相互評価の分析の試み. 日本教育工学会研究報告集, 査読無, JSET13-5, 89-92

① 谷塚光典・東原義訓・渡邊あや・喜多敏博・鈴木克明(2013) 教職 e ポートフォリオを活用した教員養成初期段階の「目指す教師像」の構築. 教育システム情報学会研究報告, 査読無, 28(2), 61-64

② 谷塚光典・東原義訓・渡邊あや・喜多敏博・鈴木克明(2013) 教職 e ポートフォリオにおける相互評価機能の実装. 日本教育工学会研究報告集, 査読無, JSET13-2, 23-28
[学会発表](計 10 件)

姫野完治, 実践知の深さと伝承の工夫. 日本教師学学会第 17 回大会, 2016 年 3 月 6 日, 奈良学園大学

谷塚光典・東原義訓・喜多敏博・戸田真志・鈴木克明, 教職 e ポートフォリオにおける観点別自己評価に見る教職志望学生の成長. 2015 年 9 月 21 日~23 日, 日本教育工学会第 31 回全国大会, 電気通信大学

姫野完治, 教師の生涯, 発達における教育実習の役割と現状. 日本教育心理学会第 57 回大会, 2015 年 8 月 26 日~28 日, 新潟県朱鷺メッセ

姫野完治・益子典文, 学び続ける教師の「学び」の特質に関する事例研究. 日本教育工学会第 30 回全国大会, 2014 年 9 月 19 日~21 日, 岐阜大学

姫野完治, 教師の能力をいかにとらえ育むか. 日本教師学学会第 15 回大会, 2014 年

3 月 8 日~9 日, 環太平洋大学

戸田緑・姫野完治, 小学校教師の学級経営観に関する一考察. 日本教師学学会第 15 回大会, 2014 年 3 月 8 日~9 日, 環太平洋大学

姫野完治, 教職志望学生の成長観の変容とライフヒストリー. 日本教育方法学会第 49 回大会, 2013 年 10 月 5 日~6 日, 埼玉大学

益子典文, 現職教師の新教材開発のプロセスモデル - 事例分析に基づく教材開発能力の水準の検討 - . 日本教育工学会第 29 回全国大会, 2013 年 9 月 20 日~23 日, 秋田大学

島田希, 初任教師へのメンタリングにおいてメンターが果たす機能とその具体的手法. 日本教育工学会第 29 回全国大会, 2013 年 9 月 20 日~23 日, 秋田大学

[図書](計 3 件)

姫野完治・益子典文・浦野弘 他(2016) 未来を拓く教師のわざ. 一荃書房, 全 230 頁

梅澤実・姫野完治 他(2014) 教職実践演習 これまでの学びと教師への歩み. わかば社, 全 157 頁

今西幸蔵・姫野完治 他(2013) 教職に関する基礎知識. 八千代出版, 全 199 頁

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浦野 弘 (URANO Hiroshi) 秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号: 50185089

(2) 研究分担者

益子 典文 (MASHIKO Norifumi) 岐阜大学・学内共同利用施設等・教授
研究者番号: 10219321

竹内 元 (TAKEUCHI Gen) 宮崎大学・教育学研究科(研究院)・准教授
研究者番号: 20335714

谷塚 光典 (YATSUKA Mitsunori) 信州大学・教育学部・准教授
研究者番号: 30323231

姫野 完治 (HIMENO Kanji) 北海道大学・教育学研究科(研究院)・准教授
研究者番号: 30359559

島田 希 (SHIMADA Nozomi) 高知大学・人文社会・教育科学系・講師
研究者番号: 40506713

長谷川 哲也 (HASEGAWA Tetsuya) 静岡大学・教育学部・講師
研究者番号: 90631854